

ド植民地国家の伝統を引き継ぎ、各種ルールの法制化と官僚組織の充実とを図った。レヴ論文「国家と社会の狭間で」は、社会の側面から、法律家という専門職の役割を強調している。かれらは、新体制下において成長しつつある「都市中間層」の代弁者となり、「民主化」促進の一翼を担う。これに対し、白石の「インドネシア国家の再配線化」は、ハビビの台頭と官僚帝国の形成を科学技術の重要性の増加と並列して論じる。そこでは、開発政策のもと、国家の安全保障戦略の一環として科学技術が認識され、それを支える組織、思想が、過去20年間の新秩序体制下の社会に浸透してきており、変容しつつあるインドネシア国家の姿が指摘される。ところが、変容しているのは国家ばかりではない。パンネルたちが「コミュニティ・レベルの参加、土着のイデオロギー、活動家の政治」で示唆しているように、社会も同時に変容しているのであり、1990年代にはすでにNGOの重要性を無視できなくなっている。しかし、NGOの役割は、組織の目的によって異なり、そこには対立が生じることもある。ジョクジャカルタのコミュニティ開発を担うベセスダ病院の活動は、かならずしも政治的問題に積極的にかかわっている法律援助会(LHB)と同一視できるものではない。とはいえ、NGOの活動は、容易に国境を越え、国際的なNGO組織と共同歩調をとり、情報交換ができるという強みがあり、それがインドネシア社会変革へも少なからず影響をおよぼすことは確かである。

以上の要約からもわかるように、本書は、網羅的ではないにしても、20世紀におけるインドネシア政治史の展開を見事に表わしている。しかし、本書には共通の問題意識があるとはいえ、各論文の問題設定、アプローチはけっして統一されてはいない。むしろ、論文ごとに、それぞれの「インドネシア」が描かれている。ところが、個々の論文にはつながりがないとはいえ、全体からはぼんやりと「インドネシア」が見えてくる。

それは、端的にいうと、「インドネシア」とはさまざまな顔をもった対象だということである。そして、「インドネシア」がすでに確固なものとして確立されたものではなく、いまだに形成過程にある姿が浮かびあがってくる。「近代」とは、既存の枠組を変える意識、運動、空間であったし、いまでもそうで

あることには変わらない。つねに変革の「過程」にあるからこそ、一つの「インドネシア」像を描きだすことにはあまり意味がなく、「過程」にあるからこそ、多様な「インドネシア」が存在する。重層的で多元的な「インドネシア」には、異なる位相があり、さまざまな「層」が刻み込まれており、それらが「インドネシアを作っている」。

しかし、本書は「インドネシア近代」の抽出に主眼をおいているために、「伝統」の側面が若干疎かになっている。反植民地ナショナリズムがそうであったように、独立後の国民国家形成過程で、「古き」伝統に新しい意味があたえられ、しだいに国家・民族の「伝統」と化してゆく。そうした新しい「伝統」も、時が経つにつれ「伝統」として「忘れ去られる」。ここにも、20世紀インドネシアにおける、時代とともに変化する「伝統」の姿を認めることができる。「伝統」も「近代」の産物となっている。⁴⁾

植民地期ナショナリズム、独立後のPKI、そしてスハルト「開発体制」は、「インドネシア」という「未来」を見つめる巨大な「近代化」プロジェクトを具現化してきた。しかし、その歩みは、ボーヴェン・ディグールやPKIを「否定」した大虐殺などによって中断され、軌道修正を余儀なくされた事実は見逃せない。21世紀を眼前にして、「インドネシア」はどこへ向かおうとしているのか。インドネシアで「一つの時代」が終焉をむかえたいま、「巨獣」インドネシアの「国家」と「国民」が歩んできた道を振り返る意義はますます高まってきている。

(山本信人・慶應義塾大学)

Peter Bellwood. *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Revised edition. University of Hawaii Press, 1997, 384p.

本書はオーストラリア国立大学考古学科において考古学Readerの職にあるベルウッド(Peter Bellwood)による東南アジア島嶼部、特にマレーシアおよびインドネシアを主たる地域とした考古学の

4) たとえば, Henk Schulte Nordholt (ed.) *Outward Appearances: Dressing, State & Society in Indonesia* (Leiden: KITLV Press, 1997) 所収の諸論文を参照。

概説書である。彼はインドネシア、マレーシア、最近ではラオスをフィールドにして調査を行っている。また東南アジア・インドの考古学に関する学会、Indo-Pacific Prehistory Associationの事務局を担当している。1985年に初版が出版され本書はその改訂版である。1980年代半ばまで東南アジア考古学の概説書はまったくなかったのが、初版が出版されたときは東南アジア考古学もようやく体系化が行われるようになったかという印象をもったことを記憶している。80年代後半はベルウッドの初版に次いで、東南アジア大陸部の概説書も出版され (Charles Higham: *The Archaeology of Mainland Southeast Asia*. Cambridge University Press. 1989), ようやく東南アジア全域について体系化が行われた。島嶼部のベルウッドはイングランド出身でオーストラリア在住、大陸部のハイアムはスコットランド出身でニュージーランド在住と、東南アジア考古学の概説書を著したふたりがイギリス出身でオセアニアに在住する考古学者であることはおもしろい。

本書の内容は多岐に亘る。とりわけ、東南アジア島嶼部は大陸部とは異なり、考古遺物の型式学的編年が非常に難しいことから、考古資料だけでは歴史叙述が困難なため、言語学を含む他分野の研究成果を積極的にとり入れている。初版出版後12年が経過したので、当然改訂すべき部分や新しく加わった部分がある。本書を読むさい、最後の部分である「まとめ」を先に読むとベルウッドが抱いている問題点がはっきりする。考古学的事実と民族移動、居住をいかに関連づけるかという考え方が本書の中ずっと流れている。この書評は私が関心をもっている部分を中心に述べたい。

東南アジアに人類が居住し始めたのは、ジャワ中部、トリニールやサンギランで発見されたピテカントロプスが最初である。原人の時代は前期旧石器時代とされる。当然、原人が残した考古遺物があるはずだ。ところが初版当時は前期旧石器といわれてきたものが近年の調査結果により否定されるものが続出している。マレー半島ではタンパニアン（Tan-panian）の石器が3万1千年前のトバの火山噴出物で封じ込められており、後期旧石器であることが確実となったし、ジャワのパタニアンも後期旧石器である。また人類進化についてもこれまでいわれてきたような猿

人、原人、旧人、新人という一系列的な進化ではなく、旧人（ネアンデルタール人）は現生人類への進化過程からはずれたものであることが明らかとなっている。大陸部でも状況は同じである。東南アジアの化石人類と前期旧石器問題は今後も揺れ動くことだろう。

ベルウッドが本書で一番述べたかったことはオーストロネシア人の移住の問題である。東南アジアの後水期の新石器文化であるホアビニアンと完全磨製石斧および土器、農耕、オーストロネシア人の移住に関する問題について、ベルウッドは興味深い見解を述べる。半島マレーと島嶼ではホアビニアン、あるいは土器をもたず、刃部磨製石斧をもつ文化が長く続いたが、前3000年ころから土器と完全磨製石斧が広がり、ホアビニアンとそれ以後の文化、つまり後期新石器文化とのあいだにギャップがみられることを指摘する。そのうえでこの断絶を北からの新たな民族、つまりオーストロネシア人の移動にともなう現象として理解する。前4000年ころから大陸部でも広く土器と完全磨製石斧が現れ、同時に居住域の変化、洞穴居住から平野部への移行という現象がみられる。大きな画期であったことはまちがいない。この現象とオーストロネシア人の移動とを関連づけ、中国南部から前4千年紀に台湾へ移住した人々の中からマラヨ・ポリネシア・グループが枝分かれし、前3千年紀にフィリピンへ、さらに前2000年までにはフィリピン、ボルネオ、モルッカへ拡散したとの雄大な仮説を立てている。その過程で、最初に中国南部から米とミレット農耕をもっていたことから、拡散の第2段階で各地の自然環境に適応して穀物から根菜農耕へ転換する場合があったことを強調する。ふつうは根菜から稲作へという過程を考えがちだが、ベルウッドは環境適応による転換と理解する。浙江省の河姆渡遺跡などの稲作農耕を起源と考える以上こういう結論になるのだろう。

島嶼部での金属器技術の始まりについては大陸部からの伝播と考え、前200年以降と推定している。また、青銅器と鉄器とは同時存在であったことを述べる。ベルウッドのいうように、この地域の青銅器には銅鼓と現地鑄造と考えられるもの、例えばフラスコ形青銅器、鐘、大型青銅斧があるが、いずれもレガリア的な青銅器である。一方で鉄器は農具と武

器などの実用品であり、明確に用途が分かれている。このことはすでに鉄器導入後の金属のあり方だろう。鉄器製作は大陸部から導入され、当地で独自に発達したとする。またマレー半島からモルッカに至るインドネシア島嶼に1式銅鼓が分布するが、型式学的年代より実際にもちこまれた時期はずっと遅れることを述べる。型式学的年代とのずれをどう解釈するかは考古学的に厄介な問題であるが、島嶼部ではそのとおりであろう。最近銅鼓空白地域であったサバ北部の孤島で銅鼓が出土したが、鼓面が円形でない点を除けば1式銅鼓そっくりの銅鼓である。ところが一緒に出土した土器の型式学的年代からは10世紀ころとされるものであり、ベルウッドのような問題は想定しなければならない。

初版出版時にもふれられていたが、インドとの接触の問題がある。東南アジア各地からインド産の考古資料が出土している。特にインド産の土器の出土は年代的に確実におさえることが可能なために重要である。ジャワ北西部のブニ遺跡やバリ北岸のスミピラン遺跡からインド南部産の回転紋土器が出土している。インド、中国との関係については大陸部でもチャンパの遺跡やベトナム南部の諸遺跡から出土するスタンプ紋土器との関係で話題となっている。インド化、中国化といった古くからの問題を現代の問題にする話題である。西ジャワとインドとの交渉は、最古のサンスクリット碑文、プールナヴァルマン碑文により5世紀には確実であるが、回転紋土器はさらに古く、後1世紀にはインドとの交渉があったことを示すものである。ところがインド産のビーズを出土した西タイのバンドンターペット遺跡や、ホーチミン市南部のゾンカーヴォ遺跡でのC14年代値が前1千年紀前半～半ばという古さを示すために、ベルウッドはインドとの交渉の開始をそのころまでさかのぼらせているのは評価できない。両遺跡とも後1～2世紀の遺物をもつので、従来どおり回転紋土器の年代観、後1世紀以降でよいと思う。ベトナム中南部の近年の調査でもインドよりは中国との関係が初期には深く、後漢との関係を示す土器が出土している。むしろベルウッドの考え方で興味深いのは、インドとの交易活動の活発化により島嶼部どうしの交渉も生じ、その結果として初期金属器時代の島嶼部の土器が広範囲に同じ特徴を示すといっ

ていることである。

年代的にかなり明確に分かる大陸部とは異なり、島嶼部はひとまとめにできない複雑さがある。マレー半島、ジャワなどと、インドネシア東部の島々とは考古学的展開が大きく違っている。そのため体系化して記述するのは大変な苦勞がある。年代の判断に困る資料が多く、インドネシアの研究者のなかには我々なら時間的な違いと解釈する型式的な違いを、民族的な違いと解釈するという方法的な差もある。ベルウッドの本書はその困難さを承知のうえで記述されたものである。彼が記しているように、本書はひとつのモデルを提起したものであり、これからの研究の案内をなすものであり、将来の調査研究により変えられるものである。東南アジア考古学に関心をもつ人だけでなく、この地域に関心をもつすべての人にお勧めしたい。

本書と合わせて、ハイアムの前著および最近出版された *The Bronze Age of Southeast Asia* (Cambridge University Press, 1996) も読まれることをお勧めする。また1998年には日本の研究者の手になる東南アジア考古学の概説書(坂井隆・西村正雄・新田栄治『世界の考古学・東南アジア』同成社)が出版されるので、日本人研究者の見解とも合わせて比較するとおもしろいと思う。

(新田栄治・鹿児島大学)

Anthony Milner. *The Invention of Politics in Colonial Malaya: Contesting Nationalism and the Expansion of the Public Sphere*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. vii + 328p.

本書は、植民地時代のマラヤにおけるマレー政治思想史研究に、新たな分析視角を取り入れようとする意欲的な作品である。著者のアンソニー・ミルナーは、マレー語史料の綿密な読解に基づいたマレー社会の政治文化の研究に一貫して取り組んできた歴史学者として知られている。ミルナーの前著『クラジャアン』¹⁾は、ナマ(nama, 名声)を高める

1) Milner, A. C. 1982. *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*. Tucson, Arizona: The University of Arizona Press.